

「小児はり」知っていますか？

先日、沖縄で初めての「**大師（だいし）流小児はり（鍼）**」の講習会を受けてきました。「**小児はり**」は大人のはりと違って刺すのではなく、**特殊な金属器具を使って皮膚をフェザータッチ**でこする事をするのです。

「小児はり」は、大正時代から昭和中期までが最盛期だったようです。医薬品が欠乏している時代でもあり、特に大阪で普及して昭和36年（1961年）頃は1日に100人以上の小児疾患を治療している鍼灸院が多く存在していたということです。しかし、その昭和36年に国民皆保険制度（現在の健康保険制度）が発足して以来、以前よりかなり安価で医者の治療を受けることが可能となり、設備の整った病医院で診てもらう人々が多くなってきました。

一方「小児はり」に関する技術の分析や研究はほとんどされず、秘密主義で協調体制がなく技術の継承さえ怠ったということです。従って、時代の潮流に流され放しとなり、徐々に衰退してきました。

しかし、「**小児はり**」は、**子どもにとって気持ちのいい療法で、自律神経のバランスを整え、免疫を高める療法**ということで、平成になって「小児はり」の普及活動が始まり、現在大阪では「小児はり」を知らない人がいない程普及している様です。

さて、「**大師流小児はり**」は7cmほどの釘の様なはりを親指と人差し指ではさみ、子どもから見えなように手のひら内で持ちます。そのはり先で皮膚をこするわけですが、1分間に150回のリズムでフェザータッチをしていきま

す。年齢によって皮膚に触れる瞬間の長さが違い、0歳児は1~2cm、1~3歳児は2~3cm、4~7歳児は3~10cmです。手の圧力は年齢によっても、皮膚の硬さによっても違いがあり、技術の習得には時間がかかりそうです。



今の医療は薬物を使用しての対症療法です。つまり咳があれば咳止め、痛みがあれば痛み止めなど症状の改善を目的として治療します。しかし、**夜泣きやキーキー声で騒ぐ疳の虫、チック、アレルギー、吃音（どもり）、発達障害などまだまだ確立した治療法がない疾患が少なくありません。**しかし、「**小児はり**」でこれらの疾患を改善しているということです。

薬物以外の治療法はないかと日頃思っていましたところ、「小児はり」の事を知り今回講習会を受講したわけです。小児科医は私一人でしたが、今後手技を体得して子ども達の免疫力アップに役に立てたらと密かに期待しております。

現代の医療は健康保険制度で縛られており、古くて新しい役に立つ医療が存在しても「**にせ医学**」として**排除する風潮**があります。私は、患者さんにとって良いものであれば、皆で検証して採用してもいいのではないかと考えております。いつの日か「小児はり」を用いて診療する日が来るかも知れません。（たまなは）